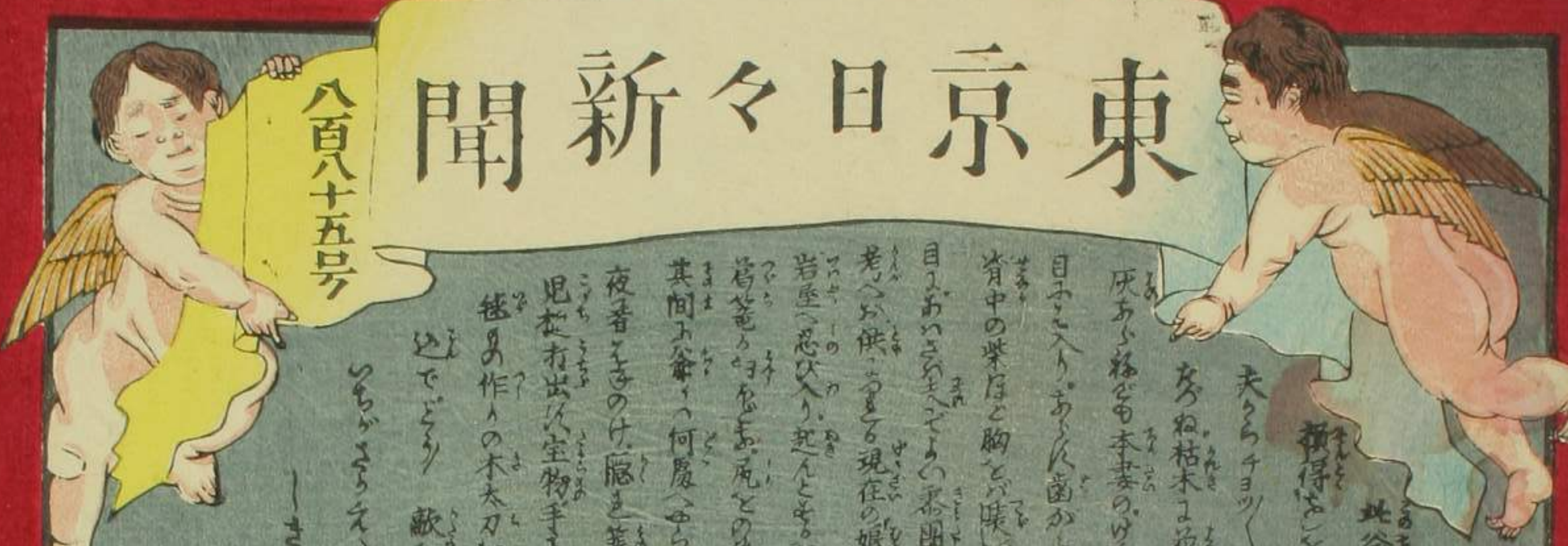


# 東京日々新聞

八百八十五号



此翁さん狸汁一を喰せ居時中、竟ふ其母と柿のくまと知らぬ敏手と握り飯ふ。  
 夫らちヨツくと御宿と  
 灰あふ箱をも本妻のゆんぐらん婆の  
 目ふこ入りあふ歯からばら物く山。  
 省中の衆は胸をい味、昔昔時時口辛らま  
 目ふおのまゝ、そのお出する日本一の趣向と  
 考へお供するも現在の娘も心鬼を扇納戸の  
 岩壁へ忍び入り、起んとせるとこのことと重い  
 着籠り時を走尻とのせりひ動させん  
 其間ふ爺、何處へさらかざるよと縁こ  
 夜香よまのけ、隠さ義の毛引ひり。  
 思は打出以宝物手ふ入てなりと笑栗の、  
 秘具の作人の木太刀と、洞の奥まで押  
 込でどろり、敵と仕とめたる夫あて  
 けもか、さうそこの豆馬鹿  
 一き断ちらけや。



震亭乙湖述

一蕙齋芳樂

甲 具足屋 渡辺彫栄

